

# 地域在住高齢者の社会参加における肯定的・否定的感情の性別・年齢層別検討

西田 芽生 (大阪大学 大学院医学系研究科, u572587g@ecs.osaka-u.ac.jp)  
 藤原 菜摘 (大阪大学 大学院医学系研究科, natsuminimail@gmail.com)  
 李 婭婭 (大阪大学 大学院医学系研究科, yayasdu2013lily@gmail.com)  
 赤木 優也 (大阪大学 大学院医学系研究科, akagi.yuya.sahs.med@osaka-u.ac.jp)  
 木戸 倫子 (大阪大学 大学院医学系研究科, mkido@sahs.med.osaka-u.ac.jp)  
 神出 計 (大阪大学 大学院医学系研究科, kamide@sahs.med.osaka-u.ac.jp)  
 樺山 舞 (大阪大学 大学院医学系研究科, kabayama@sahs.med.osaka-u.ac.jp)

## Positive and negative feelings in social activities among community-dwelling older people

Mei Nishida (Graduate School of Medicine, Osaka University)  
 Natsumi Fujiwara (Graduate School of Medicine, Osaka University)  
 Yaya Li (Graduate School of Medicine, Osaka University)  
 Yuya Akagi (Graduate School of Medicine, Osaka University)  
 Michiko Kido (Graduate School of Medicine, Osaka University)  
 Kei Kamide (Graduate School of Medicine, Osaka University)  
 Mai Kabayama (Graduate School of Medicine, Osaka University)

### 要約

社会参加をしている地域在住高齢者がもつ肯定的感情・否定的感情の実態を把握し、その性別および年齢層別の特徴を明らかにすることを目的とした。2013年大阪府A市在住の60～89歳の住民を無作為抽出し、無記名郵送自記式質問紙調査を実施した。返送率は43.3%、社会参加している1213人(男性:56.2%、平均年齢(SD):74.1(8.1)歳)の回答を分析した。肯定的感情では「いろいろな人と出会い、交流できる」(76.4%)や「楽しみや生きがいを得られる」(61.7%)等が高い割合を占め、女性では「楽しみや生きがいを得られる」(男性:56.4%、女性:68.3%)や「健康が維持・促進される」(43.8%、50.0%)が有意に高かった。一方、男性は「時間がつぶせる」(17.9%、11.1%)の回答が多かった。年齢層別では75～89歳の方が「楽しみや生きがいを得られる」の回答が有意に高かった(60～74歳:58.8%、75～89歳:65.2%)。活動に対する「不満はない」の回答は約75%に上ったが、否定的感情としては「お金がかかる」(12.4%)が最も多く挙げられた。男性は「あまり楽しくない」(3.5%、1.0%)の回答割合が高く、60～74歳では「仕事や家事とのやりくりがむずかしい」(7.1%、3.4%)「お金がかかる」(15.7%、7.5%)の割合が有意に高かった。「気力・体力が続かない」は75～89歳で有意に高かった(6.7%、10.9%)。以上より性別および年齢層別特徴が明らかとなり、満足感の高い社会参加の場づくりへの示唆を得ることができた。

### キーワード

地域在住高齢者, 社会参加, 満足度, 性差, 年代差

### 1. 緒言

今後ますます高齢者が増加すると見込まれるなか、地域在住高齢者の健康維持・増進を支援するために社会参加を促進していくことが重要だと考えられている。高齢者対策大綱では、高齢者にとって「社会参加の機会は生きがい、健康維持、孤立防止等につながる」(内閣府, 2022)ことが指摘され、住民の地縁組織への参加や自主活動しやすい地域づくりが介護予防一次施策として求められている(介護予防マニュアル改訂委員会, 2012)。

高齢者の社会参加活動の実態については、内閣府調査によると、60歳以上の61.0%が自主的なグループ活動に参加しており10年前と比べて増加傾向にある。自主

的なグループ活動をしてよかったこととしては「新しい友人を得ることができた」(48.8%)、「生活に充実感ができた」(46.0%)、「健康や体力に自信がついた」(44.4%)の順で回答割合が高かったことが示されている(内閣府, 2016)。また高齢者の「介護予防に資する住民運営の通いの場」(以下、「通いの場」)の参加理由(中村, 2016)や参加意向を示した理由(齊藤他, 2018)として、人との交流、外部の人とのコミュニケーション、健康増進、楽しみ、社会的役割などが明らかにされている。このように社会参加に対する肯定的感情は数多く報告されている。

一方で社会参加活動の不参加や中断理由として、人間関係に対する悩み(Iwasaki et al., 2019)や経済的負担(水野・廣田, 2016)、参加障壁としては身体機能や社会機能の低下(木原他, 2019)、移動が困難であること(齊藤

他, 2018) など負の側面が報告されている。このように社会参加活動の不参加理由や参加障壁といった、参加していない高齢者について検討した研究は数多く存在するが、社会参加をしている高齢者が感じている否定的感情を検討している研究はほとんどみられない。満足度の高い社会参加活動が健康によい影響をもたらしたり、QOLの向上に寄与したりすることから、参加中の者に対する否定的感情をとらえることは非常に重要であると考えられる。

また、高齢者の社会参加には性別や年齢層別に特徴があることが明らかにされている。斎藤ら (2015) は男性と女性では好んで参加する活動内容が異なり、女性は男性よりも団体・会といった集団の場への参加や友人・知人との交流をしている割合が高く、男性は女性よりも趣味や就労、外出などの機会を高い割合で持っていることが報告されている。こうした活動内容や参加率の差には、男女の対人関係 (森井, 2018) や参加目的 (高取, 2018) の違いが影響すると考えられる。また後期高齢者は前期高齢者と比較して、加齢に伴う心身機能の低下などにより、家庭外に出て社会活動に参加する機会が制限されていくことが予想される (浜崎他, 2007)。性、年齢層により活動参加状況に違いがあることから、それらを考慮し、高い満足感が得られるような社会参加の機会の提供が必要であると考えられる。

先行研究では、社会参加については多様に定義されているが、本研究では玉腰ら (1995)、橋本ら (1997) の定義である「社会と接触する活動、家庭外での対人活動」を参考にしつつ、就労を除くグループ活動 (地縁組織や会・PTA 関連・ボランティア・生協・宗教の会・同窓会・スポーツの会・趣味の会・同業者団体・政治関係の会・その他組織) の参加とした。本研究では社会参加をしている地域在住高齢者をもつ肯定的感情・否定的感情の実態を把握し、その性別および年齢層別の特徴を明らかにすることを目的とした。これにより、地域在住高齢者の特徴に応じた満足度の高い社会参加の場づくりへの示唆を得ることを目指す。

## 2. 研究方法

### 2.1 研究対象者および対象者抽出方法

本研究では、「健康と社会的活動に対するアンケート」のデータを使用した。調査対象者は 2013 年 10 月時点で大阪府 A 市に居住する 60～89 歳の一般住民である。住民基本台帳より性別・年齢層別に層化無作為抽出し、研究対象とした。郵送自記式質問紙調査を 2013 年 12 月～2014 年 3 月に実施し、対象者全体に対する返送数は 1871 人 (返送率: 43.3%) であった。有効回答数は返信があったもののうち、白紙回答 35 件を除く 1836 人だった。本研究ではこのうち、性、年齢、社会参加の項目に欠損がある人、社会参加をしていない人を除外した社会参加がある 1213 人 (参加率 72.6%) を分析対象とした。

### 2.2 調査項目

調査項目は性別、年齢、社会参加の種類、社会参加をしていてよかったと感じていること、不満に感じていることとした。社会参加の種類については以下の 11 の選択肢を提示した (選択肢: 「地縁組織や会 (自治会・老人会・校区福祉委員会等)」「PTA 関連」「ボランティア・NPO・社会奉仕団体」「消費者生活協同組合 (生協)・市民の会」、「宗教の団体や会」、「同窓会、OB・OG 会」、「趣味関係のグループやサークル、教室」、「スポーツ関係のグループやクラブ、教室」、「同業者団体・農協・労働組合」、「政治関係の団体や会」、「その他組織や会 (自由記載)」)。上記の内、本人にとって最も主となる活動を 1 つ選択することを求めた。

社会参加をしていてよかったと感じていること・不満に感じていることについては、内閣府 (2014) の「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」や先行研究 (高取, 2018; Iwasaki et al., 2019; 水野・廣田, 2016) を参照し、活動を通して感じている経験を肯定的側面 (以下、肯定的感情) と否定的側面 (以下、否定的感情) に分けて選択肢を提示した。回答は、あてはまるものすべての選択肢を求めた (肯定的感情: 「楽しみや生きがいが増える」、「いろいろな人と出会い、交流できる」、「居場所ができる」、「社会のみかたを学ぶことができる」、「技術や資格が身に付く」、「健康が維持・促進される」、「自分自身を知れる機会となる」、「時間がつぶせる」、「とりたててよかったことはない」。否定的感情: 「あまり楽しくない」、「むずかしい人間関係に巻き込まれる」、「仕事や家事とのやりくりがむずかしい」、「お金がかかる」、「自分の力が十分に認められない」、「気力・体力が続かない」、「リーダーが力量不足」、「家族の理解が得られない」、「特に不満はない」)。

### 2.3 倫理的配慮

本調査は、大阪大学医学部保健学倫理委員会の承認を経て実施した。(承認日: 2013 年 9 月 26 日受付番号 271)。文書にて研究趣旨、内容、個人情報保護、回答非回答によって不利益を被らない等の説明を行い、アンケートの返信をもって同意とした。

### 2.4 分析方法

記述統計により、各項目の集計を行ったのち、性別・年齢層別 (60～74 歳と 75～89 歳) に社会活動に対する肯定的感情と否定的感情について  $\chi^2$  検定を実施した。分析には、総計ソフト SPSS 29.0 Japanese for Windows を使用し、 $p$  値が 0.05 未満を統計学的有意差ありとした。

## 3. 研究結果

### 3.1 対象者の基本属性

対象者の基本属性を表 1 に示す。平均年齢 ( $SD$ ) は 74.1 (8.1) 歳、男性が 56.2% であった。社会参加の種類は、「趣味関係のグループやサークル、教室」が 335 人 (27.6%) と最も多く、次いで「地縁組織や会 (自治会・老人会・

表 1 : 対象者の基本属性

		全体 ( <i>n</i> = 1213)
性別, <i>n</i> (%)	男性	682 (56.2)
	女性	531 (43.8)
年齢, mean ( <i>SD</i> )		74.1 (8.1)
年齢層, <i>n</i> (%)	60 ~ 74 歳	655 (54.0)
	75 ~ 89 歳	558 (46.0)
社会参加の種類, <i>n</i> (%)	趣味関係のグループやサークル、教室	335 (27.6)
	地縁組織や会 (自治会・老人会・校区福祉委員会等)	237 (19.5)
	スポーツ関係のグループやクラブ、教室	226 (18.6)
	同窓会、OB・OG の会	178 (14.7)
	宗教の団体や会	92 (7.6)
	ボランティア・NPO・社会奉仕団体	44 (3.6)
	消費者生活協同組合 (生協)・市民の会	31 (2.6)
	同業者団体・農協・労働組合	30 (2.5)
	政治関係の団体や会	9 (0.7)
	その他の組織や会 (自由記載)	31 (2.6)

注: 「全体」に示した (%) は、各属性の縦割合を示す。

表 2 : 社会参加の種類 (性別・年齢層別)

	全体 ( <i>n</i> = 1213) <i>n</i> (%)	男性 ( <i>n</i> = 682) <i>n</i> (%)	女性 ( <i>n</i> = 531) <i>n</i> (%)	60 ~ 74 歳 ( <i>n</i> = 655) <i>n</i> (%)	75 ~ 89 歳 ( <i>n</i> = 558) <i>n</i> (%)
趣味関係のグループやサークル、教室	335 (27.6)	137 (20.1)	198 (37.3)	185 (28.2)	150 (26.9)
地縁組織や会 (自治会・老人会・校区福祉委員会等)	237 (19.5)	146 (21.4)	91 (17.1)	95 (14.5)	142 (25.4)
スポーツ関係のグループやクラブ、教室	226 (18.6)	130 (19.1)	96 (18.1)	147 (22.4)	79 (14.2)
同窓会、OB・OG の会	178 (14.7)	150 (22.0)	28 (5.3)	92 (14.0)	86 (15.4)
宗教の団体や会	92 (7.6)	33 (4.8)	59 (11.1)	53 (8.1)	39 (7.0)
ボランティア・NPO・社会奉仕団体	44 (3.6)	25 (3.7)	19 (3.6)	30 (4.6)	14 (2.5)
消費者生活協同組合 (生協)・市民の会	31 (2.6)	12 (1.8)	19 (3.6)	18 (2.7)	13 (2.3)
同業者団体・農協・労働組合	30 (2.5)	22 (3.2)	8 (1.5)	14 (2.1)	16 (2.9)
政治関係の団体や会	9 (0.7)	6 (0.9)	3 (0.6)	4 (0.6)	5 (0.9)
その他の組織や会 (自由記載)	31 (2.6)	21 (3.1)	10 (1.9)	17 (2.6)	14 (2.5)

注: (%) は、各属性の縦割合を示す。

校区福祉委員会等) が 237 人 (19.5%)、「スポーツ関係のグループやクラブ、教室」が 226 人 (18.6%) であった。性別・年齢層別の社会参加の種類を表 2 に示す。男性は「同窓会、OB・OG の会」(22.0%)、「地縁組織や会 (自治会・老人会・校区福祉委員会等)」(21.4%)、「趣味関係のグループやサークル、教室」(20.1%)、「スポーツ関係のグループやクラブ、教室」(19.1%) の順で参加割合が高かった。

一方女性は、「趣味関係のグループやサークル、教室」(37.3%) で最も高い割合を占め、「スポーツ関係のグループやクラブ、教室」(18.1%) 「地縁組織や会 (自治会・老人会・校区福祉委員会等)」(17.1%) と続いた。年齢層別では、60 ~ 74 歳、75 ~ 89 歳ともに「趣味関係のグループやサークル、教室」が最も高い割合 (60 ~ 74 歳: 28.2%、75 ~ 89 歳: 26.9%) であった。2 番目に選択割合が高かった活

動には年代差がみられ、60～74歳は「スポーツ関係のグループやクラブ、教室」(22.4%)、75歳以上では「地縁組織や会(自治会・老人会・校区福祉委員会等)」(25.4%)であった。

### 3.2 社会参加をしていてよかったと感じていること(肯定的感情)の性別・年齢層別比較(表3)

社会参加をしていてよかったと感じていること(肯定的感情)としては「いろいろな人と出会い、交流できる」(76.4%)「楽しみや生きがい得られる」(61.7%)、「健康が維持・促進される」(46.5%)の順で回答割合が高かった。性別比較では、女性の方が「楽しみや生きがい得られる」(男性:56.4%、女性:68.3%)、「健康が維持・促進される」(43.8%、50.0%)、「自分自身を知れる機会となる」(26.5%、34.0%)「社会のみかたを学ぶことが出来る」(21.6%、26.7%)、「技術や資格が身に付く」(6.6%、

12.5%)の5項目が男性より高い割合で認められた。一方、「時間がつぶせる」(17.9%、11.1%)の回答者は男性が女性より有意に高率であった。年齢層別では、「楽しみや生きがい得られる」(60～74歳:58.8%、75～89歳:65.2%)の回答割合が60～74歳より75～89歳で有意に高く認められた。その他の項目について有意差はみられなかった。

### 3.3 社会参加をしていて不満を感じていること(否定的感情)の性別・年齢層別比較(表4)

社会参加をしていて不満を感じていること(否定的感情)を尋ねたところ、「特に不満はない」を選択した者が最も高い割合を占めた(75.1%)。続いて「お金がかかる」(12.4%)、「気力・体力が続かない」(8.4%)、「むずかしい人間関係に巻き込まれる」(7.9%)の順で回答割合が高かった。性別比較では、男性の方が「あまり楽しくない」

表3：社会参加をしていてよかったと感じていること(肯定的感情)の内容(複数回答)

	全体 (n=1163) n (%)	男性 (n=649) n (%)	女性 (n=514) n (%)	p-value	60～74歳 (n=640) n (%)	75～89歳 (n=523) n (%)	p-value
いろいろな人と出会い、交流できる	888 (76.4)	484 (74.6)	404 (78.6)	0.109	492 (76.9)	396 (75.7)	0.644
楽しみや生きがい得られる	717 (61.7)	366 (56.4)	351 (68.3)	0.000	376 (58.8)	341 (65.2)	0.024
健康が維持・促進される	541 (46.5)	284 (43.8)	257 (50.0)	0.034	299 (46.7)	242 (46.3)	0.879
自分自身を知れる機会となる	347 (29.8)	172 (26.5)	175 (34.0)	0.005	193 (30.2)	154 (29.4)	0.792
社会のみかたを学ぶことが出来る	277 (23.8)	140 (21.6)	137 (26.7)	0.043	144 (22.5)	133 (25.4)	0.243
居場所ができる	209 (18.0)	113 (17.4)	96 (18.7)	0.577	108 (16.9)	101 (19.3)	0.282
時間がつぶせる	173 (14.9)	116 (17.9)	57 (11.1)	0.001	93 (14.5)	80 (15.3)	0.715
技術や資格が身に付く	107 (9.2)	43 (6.6)	64 (12.5)	0.001	67 (10.5)	40 (7.6)	0.098
よかったことはない	53 (4.6)	34 (5.2)	19 (3.7)	0.210	30 (4.7)	23 (4.4)	0.814

注：(%)は、各属性の縦割合を示す。統計解析は $\chi^2$ 検定を用いた。

表4：社会参加をしていて不満を感じていること(否定的感情)の内容(複数回答)

	全体 (n=871) n (%)	男性 (n=486) n (%)	女性 (n=385) n (%)	p-value	60～74歳 (n=523) n (%)	75～89歳 (n=348) n (%)	p-value
お金がかかる	108 (12.4)	57 (11.7)	51 (13.2)	0.500	82 (15.7)	26 (7.5)	0.000
気力・体力が続かない	73 (8.4)	43 (8.8)	30 (7.8)	0.577	35 (6.7)	38 (10.9)	0.027
むずかしい人間関係に巻き込まれる	69 (7.9)	41 (8.4)	28 (7.3)	0.528	46 (8.8)	23 (6.6)	0.242
仕事・家事とのやりくりがむずかしい	49 (5.6)	23 (4.7)	26 (6.8)	0.199	37 (7.1)	12 (3.4)	0.023
リーダーが力量不足	23 (2.6)	16 (3.3)	7 (1.8)	0.178	14 (2.7)	9 (2.6)	0.935
あまり楽しくない	21 (2.4)	17 (3.5)	4 (1.0)	0.019	14 (2.7)	7 (2.0)	0.531
家族の理解がない	9 (1.0)	5 (1.0)	4 (1.0)	0.988	6 (1.1)	3 (0.9)	0.684
自分の力が十分に認められない	10 (1.1)	5 (1.0)	5 (1.3)	0.710	7 (1.3)	3 (0.9)	0.518
特に不満はない	654 (75.1)	356 (73.3)	298 (77.4)	0.159	378 (72.3)	276 (79.3)	0.019

注：(%)は、各属性の縦割合を示す。統計解析は $\chi^2$ 検定を用いた。

(男性 3.5 %、女性 1.0 %) と回答した者が、女性より有意に高い割合で認められた。その他の項目について、性差は認められなかった。

年齢層別にみると、60～74歳が75～89歳より「仕事や家事とのやりくりがむずかしい」(60～74歳: 7.1 %、75～89歳: 3.4 % )、「お金がかかる」(15.7 %、7.5 %) について、有意に高い割合で認められた。その一方で、60～74歳に比べて「気力・体力が続かない」(6.7 %、10.9 %) と回答した者は、75～89歳において有意に高い割合であった。その他の項目について、有意差は認められなかった。

#### 4. 考察

本研究は、大阪府 A 市在住の 60 歳以上の社会参加をしている人の活動に対する肯定的感情と否定的感情についての実態と、その性別・年齢層別の特徴を明らかにした。本研究の対象者は、男性が 56.2 %、平均年齢 74.1 歳、社会参加率は 72.6 % であり、2013 年当時内閣府が実施した研究(内閣府, 2016)での 60 歳以上の地域在住高齢者の自主的活動の参加率 61.0 % と比較すると高めではあったものの、調査項目や聞き取り方の違いにより生じた程度の差であると推察された。

今回、社会参加をしていてよかったと感じていることとして「いろいろな人と出会い、交流できる」、「楽しみや生きがいを得られる」、「健康が維持・促進される」が多く認められ、社会参加をする地域在住高齢者の多くが、人との出会いや交流、楽しみや生きがいを得られたことを良かったこととして感じており、また健康への良い影響も感じていることが示された。また、否定的感情については、「特に不満はない」が大多数を占めていたものの、少数ではあるが、「お金がかかる」、「気力・体力が続かない」、「むずかしい人間関係に巻き込まれる」といった感情が認められた。

本研究では社会参加をしている人の中で 7 割を超える対象者が肯定的項目に同意をしていた一方で、否定的感情に同意した対象者は 2 割以下であった。先行研究では高齢者は人との交流、外部の人とのコミュニケーション、健康増進、楽しみ、社会的役割といったポジティブな面を求めて社会参加をしていること(中村, 2016; 齊藤他, 2018)が報告されており、これらを支持する結果であった。社会参加は、高齢者において孤立を防ぎ人間関係を豊かにすること(森井, 2018)、また心身の健康にとっても良好な影響があること(本田他, 2010; 辻他, 2022)が認められている。本研究結果から、高齢者においては社会参加が精神的健康に対して肯定的な影響を及ぼしていることが改めて確認できた。さらに、これまでほとんど検討されてこなかった、社会参加中の人の否定的感情を詳細に明らかにすることができた。これは地域在住高齢者の社会参加の機会をより満足度の高く継続性の高いものとする自治体現場の実践に資する意義が高く、本研究の新規性といえる。

続いて社会参加に対する感情を男女で比較したとこ

ろ、女性は男性より「楽しみや生きがい得られる」「自分自身を知れる機会となる」「社会のみかたを学ぶことが出来る」「技術や資格が身に付く」など生活への充実感を高める学習面や「健康が維持・促進される」などの健康・体力面において有意に満足感が高いことが示された。男性では、人数的には多くはないものの、女性に比べて「時間がつぶせる」ことの満足感と「あまり楽しくない」という不満感が有意に高く認められた。女性は男性よりも社会参加の機会によって学びを得ることや、健康面へのメリットを期待していると考えられる。こうした男女による結果の違いが得られた理由については、対象者のこれまでの人生経験の違いや A 市の環境が影響しているのではないかと考える。まず、対象とした高齢者は第二次世界大戦前後に生まれ、現在より婚姻率が高く、男女の就労率の差や教育格差、家庭内役割の違いが明確だった時代を過ごしてきた世代だと考えられる。男性は自分の知識や技術を活かした職場での就労、女性は結婚、出産、育児、子育てなどをしてきたことが主流であったと考えられる。また女性は現在ほど高等教育を受ける機会に恵まれていなかった状況も推察できる。A 市は戦後住宅開発が進み、大都市のベッドタウンとして発展してきた地域である。就労で市外へ出ている時間が長かった男性は、家庭内で過ごす時間が少なかったことが、社会参加による肯定的感情として「時間がつぶせる」ことを女性より感じていることとあらわれていると考えられる。一方女性は、男性よりも家庭内で過ごすことが多かった経験から、社会参加によって、これまで得られなかった多様な人との交流、そして経験や学びの機会により「いろいろな人と出会い、交流できる」「楽しみや生きがい得られる」「自分自身を知れる機会となる」「社会のみかたを学ぶことが出来る」「技術や資格が身に付く」といったことに、より高い肯定的感情を持っているといえる。

先行文献(田中, 2021: 65)によると、「社会的フレイルの有意な予測因子として、自立度の高い段階では、男性は外出頻度が低下し生活範囲が狭まっていくことや散歩や余暇での趣味やスポーツをしなくなるがある一方、女性は友人との繋がりがおろそかになり、何もせずじっとしている時間が増えてしまうこと」が挙げられている。満足感の高い社会参加を通して社会的フレイルを予防するには男女の対人関係(森井, 2018)や参加目的(高取, 2018)、満足感を感じる内容の違いを踏まえて、活動を続けられることが重要だと考えられる。

社会参加に対する感情を 60～74歳と75～89歳の年齢層別で比較したところ、60～74歳は「仕事や家事とのやりくりがむずかしい」ことや「お金がかかる」ことを不満に感じていると回答した割合が75～89歳より有意に高く認められた。一方で、75～89歳は「楽しみや生きがい得られる」ことをよかったと感じている割合が60～74歳より有意に高い一方、「気力・体力が続かない」ことを不満とした割合も有意に高く認められた。60～74歳では、家庭や仕事において、介護や孫の世話等の役割

や地域の役員等、フォーマル・インフォーマルな役割を担っていたり、就労していることも多く、時間が十分に取れないことが阻害因子になりやすいと推察された。また、先行研究では75～89歳の方が経済的に困窮していると報告（高橋，2017）されているが、本調査では60～74歳の方が経済面についての不満の回答割合が有意に高かった。これは、退職に伴う収入の減少や就労形態の変化、老後の生活への備えを目前として、社会参加という、衣食住以外の支出内容について経済的負担感を感じやすい時期であることが考えられた。社会参加においては60～74歳の方が75～89歳よりも経済的な負担を感じていることを示す本結果は、実際の経済的困窮度とは異なる感情を示していた。これについては支出を伴うような活動内容の参加割合が高いことも影響していると考えられた。社会参加を促進するためには、ライフコースを通じた社会的役割の変化や年齢による活動内容等の違いを踏まえた高齢者の経験・感情を捉えることが重要であると考えられた。また75～89歳は60～74歳に比べて、気力・体力不足を感じている割合が有意に高く、これは加齢に伴い身体的負担感が大きくなれば、活動自体の継続困難に繋がることを示唆している。75～89歳は、60～74歳よりも加齢に伴う筋力低下、ADL能力の低下、心理機能の低下を感じやすくなると報告されている。身近な活動を好み、社会生活が狭小傾向となる後期高齢者（浜崎他，2007）は、新たな活動の開始がより困難になると考えられる。岡本ら（2006）は、高齢期以前からの社会活動の経験は、社会活動に関わる知識やスキル、実行力につながり、地域でのつながりも生まれることから活動の開始を容易にし、社会活動の実施への不安を減少させると推察している。75歳以上の社会活動実施には、前期高齢期からの経験が強く影響している（坂上・河原田，2017）ことや75歳以上では生活範囲が狭くなりやすい傾向（浜崎他，2007）を踏まえ、継続的な社会参加の支援に向けて、年代特徴によって活動が阻害されやすい要因を考慮した対策が重要だと考えられる。

近年、「健康寿命延伸プラン」や「認知症対策推進大綱」において、高齢者が主体的に取り組む「通いの場」が我が国の重要施策として位置づけられている。本研究結果は、自治体関係者がこのような介護予防活動の現場である「通いの場」をより満足度の高いものとしていくことに適用できるだろう。たとえば前期高齢者では「仕事や家事とのやりくりがむずかしい」という回答割合が高かったことから、通いの場の開催時間を多様化したり、オンライン参加でも可能にするなど柔軟な参加形式を導入することが考えられる。また、後期高齢者に「気力・体力が続かない」という回答割合が高かったことから、「通いの場」の開催場所をできる限り近所で、アクセスが良い場所にしたり、体力に配慮した内容にしたりするという工夫が考えられる。このように本研究結果を介護予防現場での実践に適用することで、参加高齢者の満足度が高まり、「通いの場」の健康増進効果も高めることができると考えられる。

本研究の限界として6点挙げられる。まず、郵送による無記名自記式質問紙調査であるため、心身ともに回答可能な意欲の高い集団に偏った可能性がある。次に横断研究であり、因果関係は明らかではない。そして現在社会参加をしていない人は本分析には含まれていないため、活動に不満を感じてやめた人などの感情については分析できていない。調査実施時期から現代までの間にスマートフォンやオンラインサービスが全世代に幅広く普及するなど、社会環境は大きく変化したと考えられる。A市の高齢化率は22.9%から28.9%と上昇し、独居高齢者や高齢者のみの世帯も増加している。2013年当時の高齢者は、役割として義務的に社会参加をする人も多かったが、COVID-19などの健康危機を経験したことで、健康意識が高まり、積極的に自分がやりたい活動に取り組むアクティブシニアが増加している。その一方、情報格差は広がり、在宅高齢者の孤立が進んでいると考えられる。調査実施時期と現在で社会活動に求めるニーズや意向は変化している可能性がある。また本研究の対象者は、関西地方の中規模都市在住者であり、結果の一般化には限界があると考えられる。

しかし、社会参加をしている集団においてその負の側面を含めた感情の実態と特徴を属性別に明らかにすることができた意義は大きく、地域在住高齢者における、より質の高い社会参加推進に対して有用な知見が得られたと考えられる。

## 5. 結語

本研究より、社会参加をしている地域在住高齢者が感じる肯定的・否定的感情の実態として、肯定的感情を持っている割合が非常に高いことが明らかになった。さらに、性別および年齢層別の特徴があることが示された。社会参加をする地域在住高齢者の多くが人との出会いや交流を良かったこととして感じており、特に女性は学習面や健康・体力面で有意に満足度が高いことが示された。男性は人数的には多くはないものの、女性に比べて「時間がつぶせる」ことの満足度と「あまり楽しくない」という不満感が有意に高く認められた。否定的感情については「特に不満はない」が大多数を占めており、1割～2割ほどが「お金がかかる」「気力・体力が続かない」「むずかしい人間関係に巻き込まれる」といった負の感情を抱えながら活動をしていることが示された。年齢層別では、60～74歳は経済的負担を、75～89歳は身体的負担に対する不満を感じていることが明らかになった。これには、性別による対人関係や年代による経済状況、心身の健康状態の違いが影響すると考えられる。本研究により対象者属性別に、負の側面も含めた社会参加に対する感情が明らかとなり、地域在住高齢者の社会参加の機会をより満足度の高いものとする方策について示唆を得ることができた。

## 謝辞

本調査に回答していただいたA市の皆様、調査の実

施にお力添えいただいた A 保健所職員の皆様に深謝申し上げます。本研究は JSPS 科研費 25862258 (MK)、23K24672 (MK)、A 保健所受託研究費 (保健所活動特別推進事業) の助成をうけたものです。本研究における開示すべき利益相反 (COI) 状態はありません。

## 引用文献

- 浜崎祐子・佐伯和子・塚崎恵子・城戸照彦 (2007). 地方中核都市における高齢者の社会活動と幸福感に関する研究 (第 1 報) —自立高齢者の社会活動の実態—. 北陸公衆衛生雑誌, Vol. 33, 80-85.
- 橋本修二・青木利恵・玉腰暁子・柴崎智美・永井正規・川上憲人・五十里明・尾島俊之・大野良之 (1997). 高齢者における社会活動状況の指標の開発. 日本公衆衛生雑誌, Vol. 44, 760-768.
- 本田春彦・植木章三・岡田徹・江端真伍・河西敏幸・高戸仁郎・犬塚剛・荒山直子・芳賀博 (2010). 地域在住高齢者における自主活動への参加状況と心理社会的健康および生活機能との関係. 日本公衆衛生雑誌, Vol. 57, 968-976.
- Iwasaki, R., Hirai, K., and Aminaka, K. (2019). Why don't older persons attend senior salons?: Interviews with older persons living in a rural area of Japan. *Japanese Journal of Health and Human Ecology*, Vol. 85, 141-149.
- 介護予防マニュアル改訂委員会 (2012). 介護予防マニュアル改訂版. 1-37. [https://www.mhlw.go.jp/topics/2009/05/dl/tp0501-1\\_1.pdf](https://www.mhlw.go.jp/topics/2009/05/dl/tp0501-1_1.pdf). (閲覧日: 2024 年 11 月 29 日)
- Kihara, Y., Himuro, K., Showa, S., Kitazawa, K., Furuna, T., and Mori, M. (2019). Barriers to participation in a physical activity program for the elderly in one area of Hokkaido, Japan. *Bulletin of Japan Health Care College*, Vol. 5, 49-55.
- 森井琢磨 (2018). 通所介護サービスを利用している高齢者の閉じこもり要因と対策—S 県 O 市において—. 自立支援介護・パワーリハ学雑誌, Vol. 12, 100-107.
- 水野智公・廣田栄子 (2016). 高齢期の地域生活における音楽活動の現状と特性に関する研究. *リハビリテーション連携科学*, Vol. 17, 127-136.
- 内閣府 (2014). 平成 25 年度高齢者の地域社会への参加に関する意識調査結果 (全体版). <https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/zentai/index.html>. (閲覧日: 2024 年 11 月 29 日)
- 内閣府 (2016). 平成 28 年版高齢社会白書—高齢者の地域社会への参加に関する意識調査—. [https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/pdf/1s2s\\_5.pdf](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/pdf/1s2s_5.pdf). (閲覧日: 2024 年 11 月 29 日)
- 内閣府 (2022). 令和 4 年版高齢社会白書 (3) 学習・社会参加. [https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/zenbun/pdf/2s2s\\_03.pdf](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/zenbun/pdf/2s2s_03.pdf). (閲覧日: 2024 年 11 月 29 日)
- 中村廣隆・竹田徳則 (2016). 地域在住高齢者が「通いの場」

に参加する理由—世帯別・性別に着目して—. 厚生労働科学研究費補助金 (認知症政策研究事業) 分担研究報告書, 67-72.

- 岡本秀明・岡田進一・白澤政和 (2006). 大都市居住高齢者の社会活動に関連する要因—身体, 心理, 社会・環境的要因から—. 日本公衆衛生雑誌, Vol. 53, 504-515.
- 齊藤道子・山上徹也・田中繁弥・浅川康吉・山口晴保 (2018). 住民主体の通いの場への参加意向と関連要因の検討—介護保険要支援者の社会参加を促すためのリハ専門職の役割—. *理学療法群馬*, Vol. 29, 48-58.
- 齋藤民・近藤克則・村田千代栄・鄭丞媛・鈴木佳代・近藤尚己・JAGES グループ (2015). 高齢者の外出行動と社会的・余暇的活動による性差と地域差—JAGES プロジェクトから—. 日本公衆衛生雑誌, Vol. 62, 596-608.
- 坂上ゆかり・河原田まり子 (2017). 地域在住の日常生活動作が自立した後期高齢者の社会活動の実施に関連する要因. *日本地域看護学会誌*, Vol. 20, 38-45.
- 高橋秀人 (2017). 特集要介護高齢者を取り巻く環境と経済 2. 高齢者の貧困問題について. *日本老年医学会雑誌*, Vol. 54, 28-34.
- 高取克彦 (2018). 地域在住男性高齢者における健康づくりを目的とした「通いの場」への不参加要因に関する調査. *奈良理学療法学*, Vol. 10, 43.
- 玉腰暁子・青木利恵・大野良之・橋本修二・清水弘之・五十里明・坂田清美・川村孝・若井建志 (1995). 高齢者における社会活動の実態. 日本公衆衛生雑誌, Vol. 42, 888-896.
- 田中友規 (2021). 特集人生 100 年時代の性差医学 8. 社会的フレイルの性差. *Geriatric Medicine*, Vol. 59, 63-66.
- 辻大士・高木大資・近藤尚己・丸山佳子・井手一茂・Lingling・王鶴群・近藤克則 (2022). 通いの場づくりによる介護予防は地域間の健康格差を是正するか?—8 年間のエコロジカル研究—. 日本公衆衛生雑誌, Vol. 69, 383-393.

## Abstract

This study aims to investigate the positive and negative feelings experienced by community-dwelling older people engaged in social activities, including those involving different genders and age groups. Self-administered questionnaires were mailed in 2013 to people aged 60 to 89 years, who were randomly selected from the residential register of City A. The response rate was 43.3% and data were collected from 1,213 individuals who participated in social activities. 56.2 % were male, and the mean age of respondents was 74.1 (SD 8.1) years. The most commonly reported positive feelings were “Meeting and interacting with various people” (76.4 %), and “Enjoyment and motivation in life” (61.7 %). These were significantly higher among females than males: “Enjoyment and motivation in life” (males: 56.4 %, females: 68.3 %) and “Maintaining and promot-

ing good health” (males: 43.8 %, females: 50.0 %). Conversely, a significantly higher percentage of male respondents selected “I can fill my free time” compared to female respondents (males: 17.9 %, females: 11.1 %). Regarding age groups, the percentage of respondents who selected “Enjoyment and motivation in life” was significantly higher among those aged 75-89 years (65.2 %) compared to those aged 60-74 years (58.8 %). In terms of negative feelings, males were significantly more likely to report “Not much fun” (males: 3.5 %, females: 1.0 %). Among age groups, respondents aged 60-74 years were more likely to report “Difficulty in balancing work and household” (60-74 years: 7.1 %, 75-89 years: 3.4 %) and “It costs money” (60-74 years: 15.7 %, 75-89 years: 7.5 %). “Lacking physical and mental stamina” was significantly more common among those 75-89 years (60-74 years: 6.7 %, 75-89 years: 10.9 %). The results revealed gender and age differences in positive and negative feelings associated with social activities among community-dwelling older people. These results provide suggestions for enhancing opportunities for social participation that promote higher satisfaction.

(受稿：2024年10月16日 受理：2024年11月30日)